
こりないやつら

M

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こりないやつら

【Nコード】

N4957B

【作者名】

M

【あらすじ】

ある日の夜の捜査一課。帰路につく刑事たち。高木と佐藤の2人も、仲良く並んで帰っていたのだが・・・

「えーと、今日の夜勤は、千葉君だな！」

目暮警部が名簿のようなものを見ながらそう告げた。

「お先〜」

「どんまーい」

などと千葉刑事に声をかけながら、他の刑事たちはそろそろと一課を後にする。

「じゃあね、千葉君」

「頑張れよー」

佐藤刑事と高木刑事も例外ではなかった。

「やつぱ、仲がいいよなあ、お似合いだよなあ・・・」

2人並んで帰っていく所を見ながら、千葉刑事はそう呟いた。

「けど、いつになったらゴールインするんだか」

こっちまで神経使うよな、とため息をついた。

「・・・お腹空いたな・・・」

引き出しを開け、中に入っているお菓子に手が伸びる。

「はっ！？何やってんだオレ！？ダイエットしようと思ってたのに！」

後ろ髪を引かれながらも、引き出しを閉め、コンビニで買った肉まんと決別する。

もう一度ため息をついた。

「あーあ、早く調書まとめなきゃ・・・うーん・・・」
大きく伸びをする。

「うおおっ！？」

・・・椅子から落ちた。

しばらく後、一緒に帰っていた2人は公園のベンチに腰を下ろした。
自動販売機から佐藤刑事が缶コーヒーを買ってきた。

「はい、今日もお疲れさま」

「あ、どうも・・・」

高木刑事は会釈してそれを受け取った。

「・・・ねえ高木君、確か今度非番だったわよね？」

佐藤刑事がそう言いながらプルタブを引いた。

「そうですね・・・」

高木刑事も同じようにする。

「デートしよつか、久しぶりに」

「えっ!？」

動揺のあまり、缶を取り落としそうになる。

「きゅ、急な話ですね・・・」

「・・・何よ、悪い？」

佐藤刑事が拗ねているのを見て、必死に首を振った。

「い、いえ、喜んで一緒にします・・・けど」

「けど、何よ？」

「あのー、また皆に『取り調べ』されるんじゃないかと・・・」

「ああ、そんな事もあったわよね」

トロピカルマリナランドのときのことを思い浮かべた。
少年探偵団に絡まれ、事件には巻き込まれ・・・

高木刑事の偽装工作もむなしく、なぜか一課の刑事達が大集合していたのだ。

まあ、おかげでスピード解決はしたのだが・・・
今考えれば、きつと、ずっと見張られていたに違いない。

「どうします？また偽装工作考えますか？」

「・・・なんか刑事の私たちが『偽装工作』なんて言ってるのもおかしいわね」

「そ、そうですね・・・」

「どこか、誰にも邪魔されないような穴場がないかしら？」

「そうですね・・・」

と呟いた後、高木刑事はあることに気がついた。

夜の公園。

ざっと見てみたところ、静かだし、人もいない。

いつそ今すぐ、これからデート、という事にするのも悪くないのでは・・・

迷うな、高木渉！

そう自分に言い聞かせ、意を決して佐藤刑事の方に向き直る。
「さ、佐藤さ・・・！」

「　　」

佐藤刑事の携帯が鳴った。

「………」

気まずい。

佐藤刑事は、携帯と高木刑事の顔を交互に見ながら言った。

「……何？言いたいことがあるなら聞いとくけど……」

「あ、いえ、電話の後でいいです……どうぞ、出てください……」

「

高木刑事は、ため息をつきながらコーヒーに口をつけた。

佐藤刑事がボタンを押した。

「もしもし？」

『ちよーつとお、聞いてよ美和子お！！！！』

「ぶはっ・・・ゲホ、ゴホ・・・」

耳をつんざく大音量。高木刑事にも聞こえるくらいだ。

驚いた高木刑事はむせてしまった。

(・・・由美さんか・・・)

「何？落ち着いて話さないよ！」

『あのね？これから合コンやる予定だったんだけどお・・・』

「またあ？」

『ついさっきになってドタキャンしてきた人がいるのよーっ！..!』

「・・・頭数そろえたいから、私に出ろって言っただけでしょ？」

『さっすが美和子 話が分かるじゃない!』

「だれも行くなんて言っただけじゃないけど？」

『えーっ、そんなきたい事言わないでよ！食事代は向こうのおごりだし・・・』

「えっ！？何ですって、『焼肉バイキング』!？」

佐藤刑事の目が輝いた。

「さ、佐藤さん・・・」

目を点にして呆然とする高木刑事・・・

「あ・・・オホン、とにかく、私は行かないから!」

顔を赤らめて咳払いをした。

『・・・あー、そっか、高木君の手前、行くなんて言えないわよね?』

「ま、まあそうだけど・・・って、何で知ってるのよ、高木君と一緒に緒だっけ!？」

今度は佐藤刑事が叫んだ。

高木刑事も身を乗り出す。

『見かけたのよ、あんた達が2人で一緒に帰ってるトコ』

「あ、そ・・・」

ついていけないといった感じで、佐藤刑事はため息をついた。

「あ、そうだ由美、どこか、いい穴場とか知らない？」

『え？何？今度の非番に2人でデートするのオ？』

「そ、そんな事はいいいから・・・！」

「あ、由美さん、他の人には絶対に言わないでくださいよ？」
高木刑事が会話に割り込んだ。

「と、とにかく、知ってるの、知らないの？」

『うーんと、そーねえ・・・』

「！？」

その時突然、佐藤刑事の「刑事の勘」が働いた。
少し声を落として喋り始める。

「まずいわね・・・私たち、囲まれてる」

「えっ！？な、何ですか佐藤さん！？」

「しっ、振り向かないで高木君、動揺してるところを見せたらダメ・
・・・」

『え、美和子、囲まれてるって、チンピラにとか？』

携帯からも、由美の慌てた声が聞こえる。

「・・・もつと質が悪いかもしれないわね」

自嘲的な笑みを浮かべそう呟く。

『ちよつとやばいじゃない！高木君、美和子を全力で守るのよ！』
「は、はあ・・・」

そんな会話が交わされている間にも、佐藤刑事は公園の隅々まで、
神経を尖らせていた。

(・・・人数、かなり多いわね・・・)

『こちら、滑り台下の高野だ！只今佐藤、高木両名は会話を中断し、
佐藤が携帯電話で通話中！』

「相手は誰だか分かりますか？」

『こちら、ベンチ裏の福井です！相手は交通課の宮本由美のもよう』
「フッ・・・偶然とはいえ、由美さん、グッジョブです」

『会話の内容は？』

『最初、宮本が合コンに誘っていたようですが、佐藤は断ったよう
です』

「それで？」

『えー、こちら同じく川中！対象の口から『穴場』という単語が出
ました』

「なるほど？読めてきました・・・2人は非番の日にデートを計画
しているに違いありませんね」

『残念ながら、そこから先の会話は聞こえません・・・』

「分かりました・・・」

その男は一呼吸開けて、次の指令を出した。

「こちら、外灯下の白鳥！全員引き続き両名の監視を続け、高木が不審な行動に出た場合は直ちに確保してください！！」

『了解！！』

・・・ああ、『こりないやつら』。

「・・・・・・・・~~~~！！」

佐藤刑事は、もう我慢ならないという風に、声にならない声を上げ、ずっとベンチから立ち上がった。

「さ、佐藤さん？」

『どうしたの美和子お・・・』

2、3歩進み、深呼吸をする。

そして、最後に大きく息を吸い込んだ。

「聞こえてるわよおおおっ……!……!……!」

「ひひひひひっ!?!」

・・・弾かれたように、公園中の一課の刑事達が飛び上がった。

（後書き）

作者より どうも、2つ目の短編投稿、Mであります。

「こりないやつら」・・・「わるいやつら」をかなり意識したタイトルです（^^;）内容はかけ離れてますけど。

誰が「こりないやつら」といえば、もちろんメインは白鳥警部率いる（？）一課の人々ですが、広義では、千葉刑事や由美さんも入ってます（ おやつと合コン・・・（^^;））。ちなみに高野さん、福井さん、川中さんは40巻に出てた人です。そのまま使いました。想像してみてください、公園のあちこちに息を潜めて2人を見張る人々を（^^;）。そしてそれを圧倒する佐藤刑事の叫びを（^^;）

それにしてもこれから先、佐藤刑事と高木刑事はどうやってデートすればいいんでしょうね？（^^;）どこに行っても刑事たちがついて来ますから・・・（- -;）

もう1つの短編と、連載の方も宜しく御願います。 m（――）

m それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4957b/>

こりないやつら

2010年10月10日16時04分発行